



棚

田

# ライステラス

第69号 2015.8.16  
(年2回発行)

発行/全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集/ふるきやらネットワーク

〒184-0004 東京都小金井市本町6-53子-ム石塚内

TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180

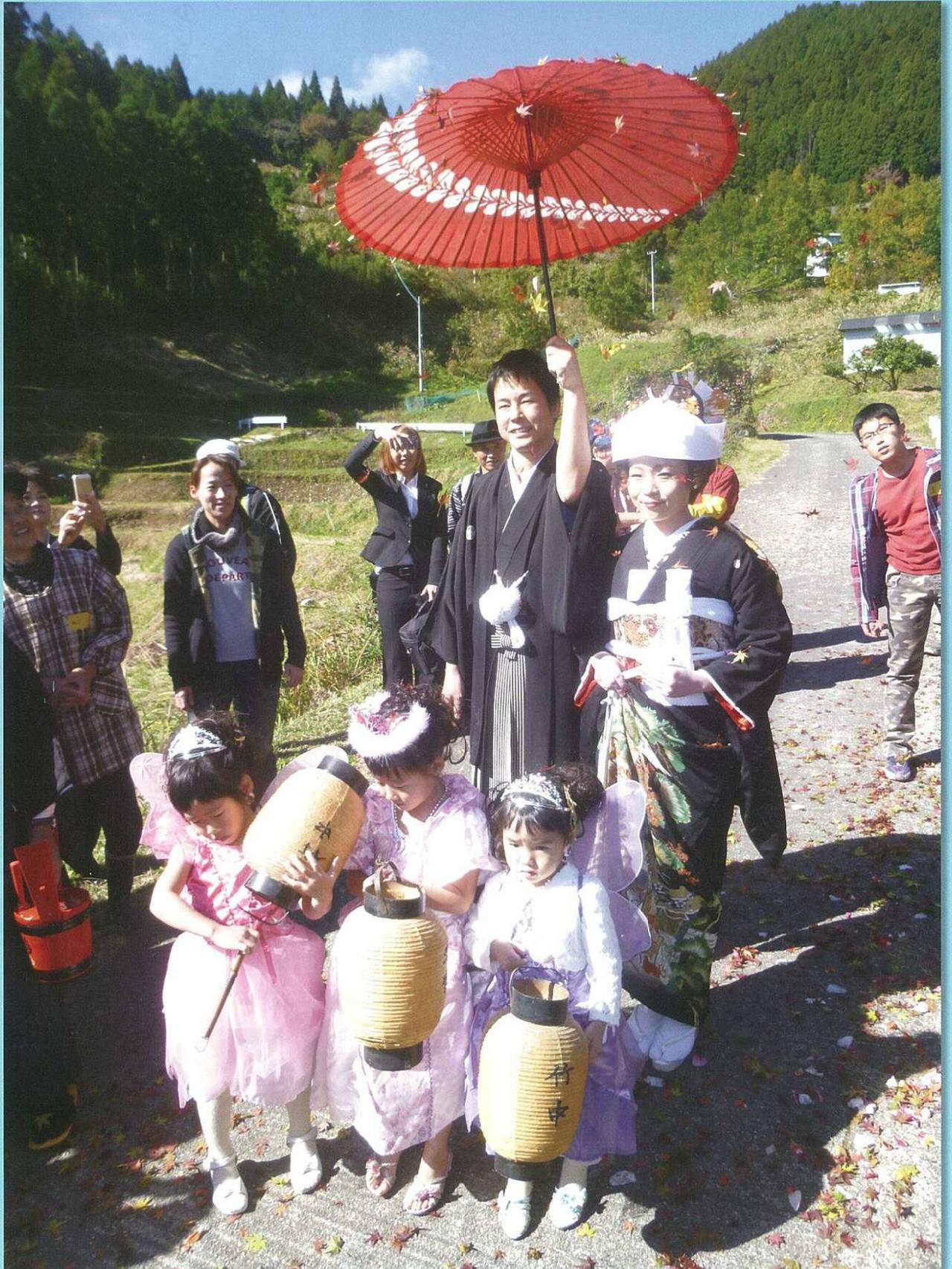
<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

全国棚田(千枚田)連絡協議会

## 特集・農山村は続く

2014年、徳島県上勝町で行われた「棚田ウェディング」。集落課題解決型の活動を実践。関連記事p.10、11。写真提供：徳島県上勝町(左)環境(まろ)くり、撮影：瀧田俊明

特集：「地元を創り直す時代」藤山浩／和歌山県那智勝浦町／新潟県十日町市／鹿児島県(湧水町ほか)／徳島県上勝町ほか／「地域文化と棚田」③鳥取県若桜町



# 農山村は続く——鹿児島県の棚田から

「ここは、藪払いがたいへんですから」

藪払いとは、草刈りのことである。鹿児島県内の取材で何度こうした言葉に出会っただろう。鹿児島は緑の密度も色も濃い。猛然とした草木の勢いが身近に迫り来る。

今回、鹿児島県内の棚田地域3か所におじゃました。北薩エリアのさつま寺元地区。鹿児島エリアの鹿児島市八重地区。そして始良・伊佐エリアの湧水町幸田地区である。

## さつま町永野寺元—3haのうち 荒廃が半分近く進みながらも

「今年、私がケガをしてしまい、寺元での活動は休ませてもらっています」

さつま町永野、寺元棚田保存会の代表、黒田敏隆さん(74)が、柔和な笑顔で迎えてくれた。棚田オーナー制度を平成18年から9年間続けてきたが、10年目での思わぬケガだった。

寺元地区は、さつま町(※1)内の東西部、旧薩摩町永野にある。古くは金山で栄えたところだ。「永野金山は1640年に発見された薩摩藩直営の金山です。産出量が多く、すぐに徳川幕府が採掘を禁止したんです。採掘量が多くて、薩摩が力を持つのを徳川は恐れて

ね。1643年から13年間、

鉱夫たちは再開を待った。その間、食べていくために、寺元に下りて棚田を拓いたんです。土坡を築き、その上に川から

拾った石を積んで造ってあります」

永野金山は1952(昭和27)年に閉山し、その320年以上の歴史に幕を下ろした。だが、江戸時代に造成された棚田は、平成の世へと引き継がれてきた。

寺元集落は現在28戸。多いときは約100戸ほどあった。寺元棚田保存会は集落全戸が入っている。水管理など常時作業するのは10人ほどだが、棚田オーナー制度のイベント時には、集落みんなで参加してきた。

寺元の棚田は全体で約3ha。ここ1〜2年で半分近くが耕作されなくなったという。川沿いに山道を登っていくと、下段、中段、上段と3か所に分かれた棚田に出会える。どの田んぼも有害鳥獣用のネットや電柵で囲われていた。

下段の棚田で、耕作をやめた田んぼの中で草を刈る人を見かけた。久保田親美さん83歳だ。「牛の餌用ですよ。家で牛を1頭飼っています。餌の草を刈るだけです。やめて3年です。田んぼ作業のとき、怪我して。去年うちのも逝って……作れんようになって。田んぼ1町3反やりました」

田んぼの上に建つ大きな家や川沿いの棚田の方をゆっくりと指さし、教えてくれた。今、この家で独り暮らしだ。息子さんは町内にいるものの、田んぼはほしめないのだという。1人で1ha以上耕作してはただけに、その荷を担げなくなつたとき、寺元で荒廃が進んだのだ。

引き受けようにも、近所の人たちももう手一杯なのだという。オーナー制度で賑わった棚田も今年は休耕田である。アブラゼミばかりが山里の静けさを打ち破り、夏を謳歌していた。

だが、ここのお米はおいしくて評判がいい。一口食べると、味に魅せられ個人で買いに来る人も多い。米は足りず、作れば売れるのだが、作り手がいない。「由緒ある棚田を残そうとい

う思いが、若い人になかなか伝わらない」とい

う。中段へと上った。

ここは半分ほど荒廃が進んだという

ものの、青い苗がそろった棚田群は緑美しかった。さらにその上、上段には民家と棚田が織りなす山里空間が空に向かって広がっていた。上段には現在、放棄地はない。かつては放棄地が

一番多くあり、オーナー制度をここではじめてという。その後、オーナー田も下段へと場を移したものの、上段では耕作が復活し、今に続いている。

棚田脇の車道から川を越え、民家の方へ向かう。ここは川の水が冷たく、かつては川の中で豆もやしを作られていたという。家と屋根続きの馬屋を持つ農家があった。数頭の黒毛の牛がいる。子牛の出荷用だ。今、ここは定年後にUターンした60代の夫婦が暮らす。ちょうど、上

の方の棚田の中で草刈りを続ける姿が見えた。黒田さんが言う。

「前は、このおじいさんが独り暮らしで、棚田も1人で作ってイベントも手伝ってくれていてね。それが突然亡くなられたんです。で、鹿児島市内に出た60代の息さんが帰ってきてくれてね。それまではちつとも帰ってきてなかったんですよ。でも、帰ってくるよと『せないかん』って思うのかもしれないですね。今、一番頼りにしています。牛も3頭だったのを6頭

にまで増やしています。奥さんも農業をしたことがないのに、すごく牛をかわいがってね」

明るい灯火を見たようだった。誰かが一生懸命



命歩いた道は、一筋の光となり、先を照らす。紛れもなく、ほのかな光を放つのだ。

寺元には約100人が暮らす。多くは跡継ぎを都市部に出したとはいいが、中学生以下の子どもが10人以上と比較的多い。棚田オーナー制度の再開を待つ人もいる。棚田を含め金山の遺跡を歩く「さつま永野ウォーキング大会」は、今年2月に第10回目を迎えた。振る舞いで出される「がね」(かにの鹿児島弁)が人気だ。これは、かにに見立てたサツマイモのかき揚げである。

魅力も多い。町内でも、寺元の活動に刺激を受けた棚田地域も出てきた。

一見弱々しく見えた灯火だが、案外強いものかもしれない。それが地域の厚みなのだろう。

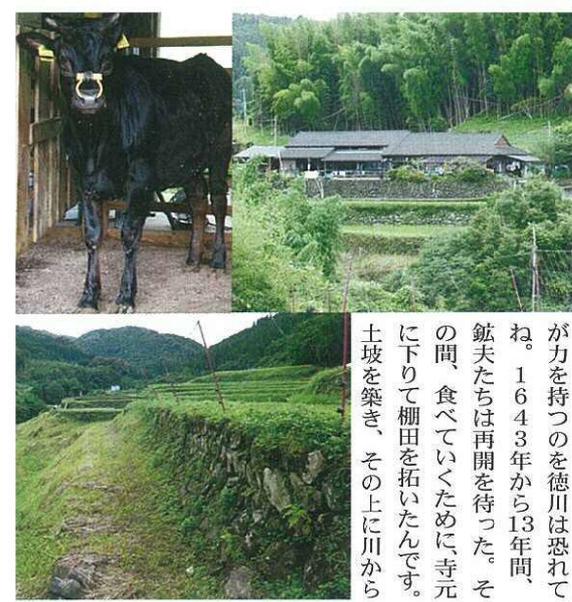
## 鹿児島市八重地区—グリーン・ツーリズムに欠かせない存在に

「景観がここは良かだなあ」

八重地区棚田保全委員会代表の桑原盛男さん(74)が豪快に言う。鹿児島市の北東部、旧郡山町八重地区。平成の大合併で鹿児島市となった。八重地区には、多いときで38戸あったが、ここ2〜3年で30戸になった。そのうち3戸に中学生以下の子どもが4人いる。

「ここは入ってもこないが、出ていかない」出て行っても、帰ってくるという。外で家を借りて暮らすよりも土地があるここに家を建て、すばらしい景観とともに暮らす選択を最近はするようになってきた。

1: さつま町寺元の棚田。中段部分。反収は10俵。寺元の米は、ヒノヒカリ粉35kg7000円で売れる  
2: 寺元棚田保存会代表、黒田敏隆さん。永野金山の観光ガイドも務める地元通  
3: 寺元の下段の棚田で出会った久保田親美さん。わらこづみの名人でもある  
4: 地元永野の山菜採りの名人。旧駅舎利用の永野鉄道記念館で黒田さんへの取材中、わらびのお裾分けをいただいた





「ここは、水と空気と米が良いところ。そして景観が良か。まあ、棚田は守らないかんとみんな思っているから帰ってくるというのもあるんですけど」

平成19年から棚田オーナー制度をスタート。8家族の受け入れからはじまった。今年には24家族と、大人気だ。毎年、脱穀をした日にもう翌年の予約が入る。



- 1: 桑原盛男さん。ここでは昭和初期まで開田が続いていたという。「物心がついたころ、戦後すぐ、田んぼ開きをしたのを覚えている」という。昭和22年が23年あたりの話
- 2: 八重棚田館。市や国の補助を利用して平成19年にできた八重の交流施設。イベント時の交流会も雨が降っても安心になった
- 3・4: 鹿児島市八重の棚田。標高は400~430m辺りに広がる。米はブランド化はしていないが、現在、ヒノヒカリ初35kgで7500円。上之丸集落と笹之段集落が30年ほど前に統合し八重地区に。もともと笹之段集落の人は、ここに田んぼはなく、ほかの地区に。だが、八重地区棚田保全委員会には笹之段の人も

今はそば植えなども含め、年7回イベントを行う。米作り体験は14年目を迎え、周囲からの継続への期待もあって「やめようにもやめられんようになってきた」とか。多くは鹿児島市内から訪れる。鹿児島市街地からは車で約40分と便も良く、家族連れもリピーターも多い。

この棚田は、豪快な石積みが連なる。明治の初め頃にはできていたようだ。昭和30~40年代には1000枚以上あった。現在、耕作している田んぼは240枚。12・4ha。この耕作者は30戸中17戸。50代が7~8人、30代もいる。

「あと20年ぐらいいはなんとかなる」という。

何しろここはロケーションがいいのだ。市の公社が運営する八重山公園と隣接し、公園の延長線上にある。八重山公園は鹿児島市街地や桜島、錦江湾を一望でき、広く愛されている。展望台、キャンプ場、野外ステージ、また甲突川の源流池など観光資源も豊富だ。それと相まって、足を運びやすい。道路も広い。駐車場もある。12haに広がる石積みの棚田は、こうした観光資源と融合し、その価値を高めている。

かつては見に来る人などいかなかった。今はアマチュア写真家も来て、注文をつけたりするほどだ。人が訪れ、人の目もあると地元は草刈りにも余念がなくなった。年に5回は草刈りする。

「田んぼは変わらんに、10年くらい前から人の見る目が変わった。『棚田、棚田』ゆうようになって……」

鹿児島市の人口は約60万人。交流人口も獲得しやすい。今後は、地方都市に仕事を求めるJターンやイターン組の居住選択の射程にも入ってくるだろう。耕作を続けることで、美しい生活環境を保つだけでなく、観光資源としての価値が高まる。まさに市のグリーン・ツーリズムに欠かせない存在となっていた。

## 鹿児島県の棚田・棚畑を守るために

鹿児島市八重地区の棚田オーナー制度には県や市からの補助があり、赤字にならず継続が可能だと聞いた。県としても棚田保全に力を入れている。「ただ保全するだけでなく、農地は農地として使ってはじめて風景になる。交流は、自分たちで農地を守っていくための手段の一つ。だから、交流にも力を入れてもらいたい」というのが県の考えだ。

平成10年、県は棚田基金の積み立てをはじめ、その運用金で棚田保全の支援を行っている（中山間ふるさと・水と土保全推進事業）。その中の保全活動支援事業として、棚田保全と都市交流に取り組む地区からの申請をもとに認定し、最初の5年間は30万円/年、その後は20万円/年の支援をする。平成27年度は、新規3地区を含め、計13地区がその対象となった。

ただ、鹿児島県も棚田地域の数は多い。県が把握しているだけで80か所以上ある。「鹿児島県の棚田とは何だろう。守っていくべき棚田は県内のどこにあり、誰がどう守っていくのか」、そんな疑問に答えるべく、県の棚田の実態をつかもうと台帳づくりが進む。平成13年頃に一度78か所のデータを集めているが、山に還ったり、また新たに把握した場所もある。

今まさに「鹿児島県の棚田(棚畑)台帳」を作成し直している最中だった。

さらに、県内の棚田を有する市町村がネットワークを組んでいるのも鹿児島県の大きな特徴だ。「棚田等保全協議会かごしま」である。鹿児島県土地改良事業団体連合会が事務局となり、さつま町や鹿児島市、湧水町など棚田を有する12市町村(※1)と各種団体が加入し、研修会開催や全国棚田サミットへの参加も継続してきた。

ちなみに、県が平成13年に初めて、棚田の保全活動を認定し助成したのは、湧水町幸田の1

地区だった。「幸田の棚田」は、日本の棚田百選でもあり、地区独自のブランド米を売り出し、田植えや稲刈りといった体験・交流も受け入れできた。県内の棚田保全活動を牽引してきたところだ。県の初認定から14年。今、湧水町において、棚田保全と地域の元気はどうつながっているのだろうか。湧水町(※3)へ向かった。

## 湧水町幸田 小学校を核とした地域づくり

「ここはいいですよ。朝起きたときの緑の感触……。気持ちの良かこと……」

湧水町幸田地区の副区長、宮里廣昭さん(67)が大きく息を吸うように話す。役場からは約数km、棚田と木々の緑が織りなす光景の中、深呼吸をする贅沢がここにある。だからであろうか、荒れた棚田は目立たず、草刈りも行き届いている。

現在、幸田地区には、約300世帯約700人



湧水町幸田。9月下旬になると『日本の棚田百選』ウォークin幸田が開催。9回目の昨年、県内外から約200が参加。写真提供、湧水町役場

\*2: 「棚田等保全協議会かごしま」の会員市町村は、鹿児島市、日置市、指宿市、南九州市、薩摩川内市、長島町、さつま町、霧島市、湧水町、大崎町、南大隅町、屋久島町



向かって左が、幸田区長の吉水康夫さん。右が宮里廣昭さん。幸田コミュニティセンターにて



標高300~400mという幸田の米は昔から評判が良い。町のブランド米は「湧水米」。幸田の農家4戸で結成する生産組合の米は「棚田米」。幸田の棚田米は「幸田米」



明治12年の幸田の絵図。複写もされておらず、現物。地域の人でもなかなか目に見えない



幸田頭の棚田。武者返しが見事な幸田頭では、3人の人が耕作。この下辺りに植林はされているものの、独特な石積み棚田があるという

### 幸田頭の棚田と明治12年の絵図

が暮らす。高齢化率は43・75%。約1万人の町内には16の地区があり、幸田地区はその一つ。8つの集落で成り立っている。

幸田地区にある幸田小学校は児童数35名。町内に5つある小学校うちの1校である。幸田地区は、小学校を核とした地域づくりを重んじてきた。町でも学校統合の予定はない。

「この小学校は幸田にある町営住宅の子どもたちで持っているようなもんです」

宮里さんが笑う。平成12年、幸田に3棟の町営住宅が最初に建った。地元の子育て世代がここに帰ってきた。地域の要望は続いた。平成25年にも増え、現在、若い29世帯が町営住宅で暮らす。

「ほかの地域からはうらやましいと言われますね。これができるようになっていなければ、子どもがいなくなってしまうよ。地元としては、まだ造りたいですね」

区長の吉水康夫さん(64)が言う。小学校の周辺に建てたことで、子育て世代はより安心し、幸田での暮らしを選びはじめた。

「幸田は田んぼが主。だから、ここに住む人が(暮らす環境の)棚田を大事にしていかなければ、地域は良くなっていかない。誰かが最初に先頭切ってコツコツやっていたら、おいどんも加勢せねば、とみんなついてくるようになる」

今、「多面的機能支払交付金(水土里サークル活動)」で、田植え前の田んぼ一帯に観賞用の菜の花を植えようと宮里さんは考えている。

「ここは30代の農家もいて、若い人が多いです。でも、だんだんお年寄りが多くなって、田んぼを作れん人も出てきた。毎年田植え前、水路清掃や整備をするとき、みんなが寄ってきて自然と井戸端会議になる。そこで『今年は作れん。誰か作ってくれる人はおらんのかい』と話が出、「良かよ」と話がまとまるんですよ」

地区はあうんの呼吸で動いている。互いの信頼関係が壊れていないからこそ、声をかけあえば、協力し合う体制があるのだ。

幸田の中でも最上部、標高400mほどの幸田頭の石垣が見事と、そこを中心に10haが「日本の棚田百選」に認定されている。武者返しといった反り返った石積みがある。とはいっても幸田地区は全体に棚田ばかりだ。標高約650mの国見岳から北へと流れる幸田川沿いに細く長く、田んぼが拓かれていく。緩やかな傾斜の棚田の重なりが川沿いに続き、集落をよわらかに彩る。

「ここは幸田頭だけでなく、もともと幸田はぜんぶが石垣でね。耕運機がいかないくらい全部石垣でした。田植えも2人入れればいくらい狭い。本当に狭い。みんな何枚も持っていて、牛で起こしている時代は良かったけどな」と宮里さん。平成2年に37haの整備が完了した。吉水さんが続けた。

「ほ場整備のうちも4枚になりましたけど、昔は5反ぐらいで20枚以上ありました。整備のとき、石がかなり出てきましたね。石を捨てるのが大変でした」

その後は保存を意識し、「棚田地域等緊急保全対策事業」(平成9~12年)を入れ、できるだけ棚田の姿を残すよう整備を進めてきた。平成25年には棚田の奥に駐車場を設け、そこへ向かう狭い道も拡張の予定だ。

「幸田頭の棚田は、鉾山の人たちを呼んで造ったゆえで、聞いてるんですよ」

宮里さんが記憶を探るように話す。「今、85、6歳のおばちゃんの話には、その人のお父さんがあの棚田の石垣を造りやった人から、新しいゆえで。その人は山ヶ野金山の技師で。その人ならある程度覚えちよつたろう。幸田頭は、鉾山関係の人たちが何人か来て加勢して、田んぼの横を流れる川から石を集めて、もつこで運んで造ったゆえで……。ろくに飯も回らん人もあった……。ゆえでたなあ」

85歳といえば、昭和1桁世代である。その親が携わったならば、大正ごろの造りであろうか。

「ここに古いもんがあるんですよ」

宮里さんが話を聞いていたコミュニティセンターの壁の上を指した。長細く巨大な木の箱が目に入った。長さは3~4mはあるだろうか。箱を開けると、長い巻物が出てきた。大人が4人がかりで広げた。巨大な絵図だった。

明治12年(1879年)作成の、幸田村の絵図だ。現在の小学校辺りの水田や家々や道も、今とそう変わらないという。田畑が川沿いに拓かれた豊かな山里が絵図から見えてくる。幸田頭の地名を探した。

絵図の中の幸田頭は山だった。同じ幸田村で、国見岳の北側の鉄山にも石積みの棚田群があるが、そこも山だった。明治12年には、武者返しの石垣はなかったのだ。山の奥に、巨大な石垣を組む財力と労力とその必要性は、明治以降になつて出てきたようだ。幸田川を遡れば、江戸時代にはすでにあつた緩やかな棚田からはじまり、さらに奥へ奥へと開墾し、石をより高く積んだ棚田を見ることが出来る。

今、このルートを通り、幸田地区全体の棚田を楽しむことができるウォーキング大会が人気だ。今年9月には、第10回目の「ウォークin幸田」が開催される。

棚田のある美しい地域だからこそ、田んぼの保全が地元の誇りを守っている。そして誇りが、子どもや子育て世代の呼び込みへとつながっている。こうしてコミュニティは続き、農山村も続く。

幸田鉄山の棚田。ウォーキングのルートでもある。かつて、大牟礼集落の青年部が中心に棚田ゴルフも開催したが、現在は行われていない



\* 3: 湧水町は人口1万人で、年間観光客は73万人。宮崎県に隣接し、熊本県も近く多方面から訪れる。湧水町では定住人口よりも交流人口を増やそうと修学旅行の受け入れや各種イベント開催が盛んだ。野外彫刻の県立霧島アートの森もあり、町民参加の大型造形作品づくりも好評である

取材・文・石井里津子